

フランス語の再帰／非再帰形自動詞と非対格性

井口 容子

1. はじめに

他動詞の目的語が自動詞の主語にあたる、という形で対応する動詞を「転換動詞(verbe à renversement)」と呼ぶことにすると、その自動詞用法において再帰代名詞の *se* を伴うタイプ(ex. *Les vitres se sont brisées*) と伴わないタイプ(ex. *Le linge a séché.*)があることがよく知られている。また *casser* のように両方の形を持つものもある(ex. *Le verre s'est/a cassé.*)

自動詞用法において再帰代名詞を伴うか否かという問題に関しては、idiosyncrasique な問題としてとらえる研究者が多い。これに対して Zribi-Hertz(1987)はこの相違は共時的な規則性において説明できるとする立場をとるものであり、注目に値する。

一方、理論的な面においては、この問題は関係文法、生成文法の分野で注目を集めている「非対格性(inaccusativité)」の問題にかかわるものであるといえる。*fondre* や *brûler* 等は自動詞用法において非再帰形をとり、複合形の助動詞としては *avoir* を選択する。

- (1) La neige a fondu.
- (2) La maison a brûlé.

だがこれらの動詞は一般に非対格動詞として分類されるものなのである。助動詞として *avoir/être* のいずれを選択するかという問題は、非対格性の指標として最もよく知られるもののひとつである。すなわち非対格動詞は助動詞として *être* を選択し、非能格動詞は *avoir* を選択する。フランス語

の場合、*arriver*, *venir* 等の非転換、すなわち対応する他動詞用法を持たないタイプの非対格動詞の場合は、*exister* 等の少数の例外を除いて、この原則に従っているといえる。ところが転換動詞の場合は、自動詞用法として再帰形をとる場合には *être* を選択するが、非再帰形をとる場合は大部分が *avoir* を選択する。この点、イタリア語とは大きく異なっている。

(3) *Due navi nemiche sono affondate.*

‘Two enemy ships have(essere) sunk.’

cf. *L’artiglieria ha affondato due navi nemiche.*

‘The artillery has(avere) sunk two enemy ships.’

(Burzio 1986)

このような事実を前に、助動詞としての *avoir/être* の選択は、フランス語においては非対格性の指標としてふさわしくない、と考えるのもひとつの結論であろう。しかしながら、逆に自動詞用法において *avoir* を助動詞として選択するものは、その「非対格性」において、何らかの問題があるのではないかと考えることもできる。

本稿においては、このような視点から再帰／非再帰形自動詞の問題を考察してみたい。

2. 語彙的アスペクト

2. 1. 完了性

— Zribi-Hertz (1987) による分析 —

Zribi-Hertz (1987) は、転換動詞が自動詞用法において再帰形／非再帰形のいずれをとるかという問題に対して、共時的な規則性において説明し得る、という立場に立ち、彼女が CRE (construction réflexive ergative: 再帰能格構文) と呼ぶ、再帰形自動詞を含む構文を派生させるための生産的なメカニズムを定式化した規則を提示している。このメカニズムにおいて、重要な役割を果たしている概念が「完了性」である。

Zribi-Hertz は、再帰形自動詞と非再帰形自動詞 (Zribi-Hertz の用語で

は、それぞれ「再帰能格動詞」と「非再帰能格動詞」)¹⁾を区別する特性は、アスペクトにおける相違である、とする。再帰能格動詞は完了的(perfectif)であり、非再帰能格動詞は未完了的(imperfectif)な傾向をもつのである。

たとえば *couler* に関しては、(4), (5)が示すように、*dans le moule* という「到達点(goal)」の意味役割をになう前置詞句を伴って完了的な意味を持つ場合にのみ、再帰能格構文は可能である。

- (4) a. La cire coule.
 b. *La cire se coule.⁻²⁾
- (5) a. La cire coule dans le moule.
 b. La cire se coule dans le moule.

また、(7)における *d'une nouvelle pelouse* という前置詞句は、変化の結果である最終状態を表わすものであるため、これを含む文は完了の意味を持つものであるといえる。(6), (7)が示すように、この前置詞句を含む場合には、再帰能格構文のみが許容される。

- (6) a. Le jardin a beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.
 b. Le jardin s'est beaucoup embelli depuis l'hiver dernier.
- (7) a. *Le jardin a embelli d'une nouvelle pelouse.
 b. Le jardin s'est embelli d'une nouvelle pelouse.

荒井(1988)は Zribi-Hertz(1987)の主張する「完了性」の基準は、いくつかの点において再帰能格構文派生の要件として有効性に疑わしい面があるとして、これを規則から取り除くことを提案している。そして *muer* や *couler* 等の非再帰能格動詞は「非転換-能格動詞」とし、他動詞と派生関係で結ばれるか否かを再帰／非再帰能格動詞を分ける基準とする。

(4a)における *couler* のような動詞を「非転換」動詞とみなす、という点においては、我々は荒井(1988)と一致する。(8a)が示すように、(4a)に対する他動詞文は非文である。

- (8) a. *La secousse a coulé la cire.

b. La secousse a coulé la cire dans le moule.

ただ、再帰能格動詞を論ずる際、「完了性」はやはり排除することのできない概念であると思われる。*couler* のような動詞がどうして「非転換」、すなわち対応する他動詞を持たないのか、ということを考える必要がある。この点において「完了性」は重要な役割を果たす概念であると思われるのである。

ところで Levin & Rappaport Hovav (1995) は、「運動の様態を表わす動詞 (verbs of manner of motion)」と共に用いられた場合の《directional phrase (方向を表わす句)》について次のような指摘をしている。

- (9) a. The soldiers marched (to the tents).
 b. The general marched the soldiers to the tents.
 c. ??The general marched the soldiers.
- (10) a. The horse jumped (over the fence).
 b. The rider jumped the horse over the fence.
 c. ?The rider jumped the horse.
- (11) a. The mouse ran (through the maze).
 b. We ran the mouse through the maze.
 c. *We ran the mouse.

(9)-(11)が示すように、*march*, *jump*, *run* のような「運動の様態を表わす動詞」は *to the tents* や *over the fence* のような directional phrase を伴う場合にのみ他動詞用法が可能である。この現象は Zribi-Hertz (1987) の指摘する *couler* の例と類似性をもっている。(8)が示すように、*couler* の場合にも *dans le moule* という方向を表わす前置詞句を伴っている場合にのみ、他動詞用法が可能なのである。次節においては(9)-(11)のような現象に対する Levin & Rappaport Hovav の分析を詳しくみたい。それは本稿で検討しているフランス語の問題に対しても重要な示唆を与えるものと思われるからである。そしてこの問題は非対格性の問題につながっていくのである。

2. 2. directional phrase の役割

— Levin & Rappaport Hovav (1995) による運動動詞の分析 —

(9)-(11)のような現象に対する Levin & Rappaport Hovav(1995) の説明は次のようなものである。*march*, *jump*, *run* のような運動の様態を表わす自動詞は基本的には非能格動詞である。しかしながら directional phrase を伴う場合には、これらの動詞は *arrive* や *come* 等と同様の「directed motion (方向付けられた運動) を表わす動詞」となり、非対格動詞となるのである。

この点をもう少し詳しく説明すると次のようになる。Levin & Rappaport Hovav は、意味的な構造と統語的な構造とを結びつける「リンキング規則 (linking rule)」として、《Immediate Cause Linking Rule》, 《Directed Change Linking Rule》, 《Existence Linking Rule》, 《Default Linking Rule》の4つを提案している。このうち《Immediate Cause Linking Rule》は次のような形で定式化されるものである。

(12) Immediate Cause Linking Rule

The argument of a verb that denotes the immediate cause of the eventuality described by that verb is its external argument.

(Levin & Rappaport Hovav 1995: 135)

いわゆる「動作主 (agent)」の役割を担うとされる項は、典型的な《immediate cause (直接的原因)》であるといえることができる。

さて *march* や *run* 等の運動の様態を表わす動詞であるが、これらの動詞の唯一の項は「動作主」であり、immediate cause とみなされる。このため統語的には「外項 (external argument)」の地位が与えられることになる。こうしてこれらの動詞は非能格動詞として分類されることになるのである。そしてこれらの動詞は他動詞用法も持ち得ない。なぜならば、そのような用法は二つの項に外項の地位を与えてしまうからである。(9c), (10c), (11c) の許容度が低いのはそのことを示している。

ところが (13a-c) のように directional phrase が付くと、事情は一変する。

- (13) a. The soldiers marched *to the tents*.
 b. The horse jumped *over the fence*.
 c. The mouse ran *through the maze*.

先に述べたように、Levin & Rappaport Hovav が提案するリンクングのシステムは4つの規則からなるが、そのうちのひとつ《Directed Change Linking Rule》は次のような形で定式化されるものである。

(14) Directed Change Linking Rule

The argument of a verb that corresponds to the entity undergoing the directed change described by that verb is its direct internal argument.

(Levin & Rappaport Hovav 1995: 146)

(13)のように方向を表わす前置詞句を伴う場合、これらの運動動詞の唯一の項は「方向付けられた変化を受ける対象」と考えることができる。したがって Directed Change Linking Rule により、これらの動詞は非対格動詞であるということになる。しかしながら(13)においても、*the soldiers, the horse, the mouse* が動作主であることに変わりはない。となると、Immediate Cause Linking Rule は、これらの動詞を非能格動詞として分類することになる。このように複数のリンクング規則が異なった判断を示す場合、どちらの規則が優先的に適用されるかという、規則間の順位が問題になってくる。Levin & Rappaport Hovav は Directed Change Linking Rule は Immediate Cause Linking Rule に対して優先性を持つものとする。したがって(13)のように方向を表わす句を伴う場合、*march*等の運動動詞は非対格動詞としてのステイタスを持つことになる。

Directed Change Linking Rule の優先性は、他の事実によっても裏付けられる。*arriver, venir*のような、Levin & Rappaport Hovav が《verbs of inherently directed motion》と呼ぶ動詞は、その主語が動作主と解釈され得るか否かにかかわらず、常に非対格動詞としての特性（たとえば助動詞としての *être* の選択など）を示す。このことは、Directed

Change Linking Rule が Immediate Cause Linking Rule に対して優先性を持つと考えることによって説明される。

運動の様態を表わす自動詞が、directional phrase を伴う場合、非対格動詞として分類されるということは、次のような事実によっても確認される。

(15) a. Ugo *ha* corso meglio ieri.

‘Ugo ran better yesterday.’

b. Ugo è corso a casa.

‘Ugo ran home.’

(Rosen 1984)

イタリア語の *correre* は (15b) のように directional phrase を伴う場合には、助動詞として *essere* を選択するのである。

以上、運動の様態を表わす自動詞は、directional phrase を伴う場合には非対格動詞となるということを見てきた。そうであるならば、(9b), (10b), (11b) のような他動詞文も問題なく許容されることになる。*the soldiers, the horse, the mouse* は直接的内項 (direct internal argument) のステータスをもつのであり、外項 (external argument) の位置は空いている。外的原因 (external cause) を表わす名詞句を導入することに何の問題も生じない。

2. 3. 〈directed change〉と完了性

前節においてみた Levin & Rappaport Hovav(1995) の分析の中心となっている「方向づけられた変化 (directed change)」という概念は、「完了性」あるいは〈telicity〉といったアスペクトの概念と関連のあるものである。directed change を表わす動詞の大部分のものは、Tenny (1994) のいう意味での〈delimited event〉であるといえる。たとえば (15b) における directional phrase である *a casa* は「到達点(goal)」の意味役割を担うものであり、delimiter として機能している。

抽象的な意味での directed change を表わす動詞である *casser* のよう

なものも、*cassé*によって表わされる状態を「到達点」としてもつ delimited event である。

Levin & Rappaport Hovav も、1992年の論文において運動動詞(verbs of motion) の分析を行なった際には、《directed change》という概念はまだ用いておらず、アスペクト的な面にむしろ注目している。

Levin & Rappaport Hovav (1995) は《telicity》ではなく《directed change》という概念に言及してリンク規則を定めた理由を次のように説明している。《directed change》を表わす動詞の大部分のものはアスペクト的には telic であるが、atelic のものも存在する。それには《atelic verbs of change of state》と《atelic verbs of inherently directed motion》の二つのタイプがあり、前者には *widen*, *cool* 等の《degree achievement verbs》とも呼ばれるものが相当し、後者には *descend*, *rise* のような動詞が当たる。《atelic verbs of change of state》が表現する事行は、*break* に代表される他の状態変化を表わす動詞とは異なり、ある一定の指向性をもつ変化ではあるが、必ずしも最終状態に達すること(achievement of an end state) を含意しない。たとえば *A road widens*. という時、確かに道は「より広くなる」という方向で変化しているのであるが、その結果必ずしも客観的に「広い」といえる状態になっている必要はない。一方、《atelic verbs of inherently directed motion》に関しても同様のことがいえる。*descend* 等このタイプの動詞は、*arrive* に代表されるその他の《verbs of inherently directed motion》とは異なり、一定の方向をめざす運動を表現しているのではあるが、必ずしも終局点に到達する必要はない。

(16) a. The plane descended *for fifteen minutes*.

b. The plane descended *at three o'clock*.

(Levin & Rappaport Hovav 1995)

descend が(16b)のような「at + 時刻」だけでなく、(16a)のように「for + 時間」とも共起するということは、この動詞が atelic な用法を持

つことを示している。

Levin & Rappaport Hovav (1995) はこれらの《directed change》を表わす atelic な動詞は非対格動詞であるとし、それを裏付ける統語的な証拠をいくつかあげている。これらの動詞が非対格動詞であることを正しく予測するためには、リンク規則は《telicity》ではなく、《directed change》の概念によって規定されねばならない、というのが Levin & Rappaport Hovav の主張である。

Levin & Rappaport Hovav(1995) がこれらの動詞の非対格性を示す証拠としてあげた現象の中に、イタリア語において、《atelic verbs of inherently directed motion》は助動詞として *essere* を選択する、ということがある。フランス語の場合を考えてみても、これは頷けることである。

(17) L'avion est descendu pendant quinze minutes.

(17)はフランス語の *descendre* が atelic な用法においても、助動詞として *être* を選択することを示している。

ただ《atelic verbs of change of state》の非対格性を示す証拠としては、Levin & Rappaport Hovav は、このタイプの動詞の大部分が「使役転換 (causative alternation)」と呼ぶ形での他動詞用法を持つということと、《X's way construction》と呼ばれる構文を許容しないことを指摘しているにすぎない。また助動詞の選択に関しても、少なくともフランス語においては、《atelic verbs of change of state》は問題を含んでいる。このタイプの動詞は、*refroidir* のように、*avoir* を助動詞として選択する非再帰形自動詞と、*s'élargir* のように再帰形自動詞であり、助動詞として *être* を選択するものに分かれるのである。

いずれにしても、Levin & Rappaport Hovav (1995) がアスペク特的な概念ではなく、《directed change》という概念を採用したことの根拠としてあげた動詞は、数の上でも少数である。また、《atelic verbs of change of state》に関しては、その非対格性を主張する論拠もそれほど強いものとは思われない。このことは、リンク規則をアスペク特的概念によっ

て規定する可能性がまだ残されていることを示唆する。本稿においてはこの二つの概念のどちらを採用するか、という問題はまだオープンにしておきたい。大部分の動詞に関しては、この二つの概念のいずれにおいて規則を設定しても、同じ結果を予測するのである。

2. 4. *couler, glisser*

以上のような観点から例文(4), (5), (8)をみると、次のようにいうことができる。非再帰形自動詞の *couler* はアスペクトの面からいうと未完了的であり、Levin & Rappaport Hovav (1995) のいう《directed change》を表わす動詞ではない。自動詞 *couler* の表わす事行は「内的原因」によって引き起こされるものであると考えられるため³⁾、《Immediate Cause Linking Rule》により、この動詞の唯一の項には外項のステータスが与えられる。つまり非再帰形自動詞の *couler* は非能格動詞なのである。

一方、(4b), (5b) が示すように、再帰形自動詞 *se couler* は *dans le moule* のような directional phrase を伴う場合にのみ可能である。*se couler* は《directed change》を表わす動詞といえる。このため《Directed Change Linking Rule》が適用されて、非対格動詞として分類されるのである。他動詞 *couler* はこの *se couler* に対応するものとしてのみ許容される。

同様の現象が *glisser* に関してもみとめられる。

- (18) a. L'enfant a glissé.
 b. *L'enfant s'est glissé.
 c. L'enfant s'est glissé dans le lit.

(18b-c) が示すように、再帰形自動詞の *se glisser* は *dans le lit* のような directional phrase を伴う場合にのみ可能である。*glisser/se glisser* 間には「すべるーすべり込む」の意味の違いがある、ということもできる。他動詞用法が許容されるのは、《directional phrase》を伴い、「すべり込ま

せる」の意味を持つ場合のみである。「すべらせる」の意味での他動詞は許容されない。

(19) a. Paul a glissé une lettre sous la porte.

b. *Paul a glissé l'enfant.

以上のことから、*glisser* に関しても、*couler* の場合と同様、非再帰形自動詞は非能格動詞であり、再帰形自動詞のみが非対格動詞として分類されることになる。

このように考えると、Zribi-Hertz (1987) の「非再帰能格動詞」という呼び方は、*couler* に関してはふさわしくないといえる。なぜならこの名称は、この動詞が非対格動詞であることを前提とするものだからである⁴⁾。

3. 内的原因／外的原因

fondre は状態変化を表わす完了動詞でありながら、自動詞用法において非再帰形をとり、助動詞として *avoir* を選択するもののひとつである。

(20) a. La neige a fondu.

b. *La neige s'est fondue.

「とけるーとかす」という意味を表わす転換動詞は多くの言語においてみられるが、自動詞形、他動詞形のどちらが形態的により基本的な形であるかという点になると、言語間において違いがみられることが指摘されている。多くの言語においては他動詞形がより基本的な形であり、自動詞は派生された形をとるが、逆のパターンをとる言語も少数ながら存在するというものである。Levin & Rappaport Hovav (1995) はこの事実に対して次のようにコメントしている。この相違は、当該の言語がこの動詞の表わす概念を、外的原因 (external cause) によるものとして捉えているか、それとも内的原因 (internal cause) によるものとして捉えているか、ということによるのである。そして内的原因によるものとして捉えている言語においては、それを反映する現象として、自動詞用法における主語に対して次のような制限が課せられる。すなわち氷やアイスクリームといった室

温でとけるような物質のみが自動詞用法の主語となりうる、というのである。(pp. 99-100)

内的原因による事行の代表的なものとしては、*speak* や *play* のような動作主を主語としてとるタイプの自動詞があげられる。しかしながら内的原因による事行がすべて動作主的(agentive)であるわけではない。その例として Levin & Rappaport Hovav (1995) が「放射動詞 (verbs of emission)」と呼ぶ、*clang*, *crackle*, *flash*, *glitter*, *reek*, *bubble* 等の一連の動詞があげられる。これらの動詞の主語は動作主ではない。しかしながらこれらの動詞が表わす事行は、主語である項に内在する何らかの特性によって生ぜしめられている、ということができる。この意味において、これらの動詞も「内的原因」によって引き起こされるものであるといえるのである。また(21)にみられる *bloom* のような動詞も、内的原因によるものであるということができる。

(21) The cactus bloomed.

(Levin & Rappaport Hovav 1995)

さて「とける」という概念は、外的原因によるものとも内的原因によるものとも捉えられ得る、という Levin & Rappaport Hovav の指摘は、興味深い示唆を含んでいる。フランス語もこの動詞を内的原因によるものとして捉えているように思われるのである。もちろんフランス語の自動詞 *fondre* の主語は室温でとける物質に限られるわけではない。Levin & Rappaport Hovav の指摘する選択制限は、内的原因による事行であるということを示すひとつの指標にはなるであろうが、必ずしも絶対的条件としてとらえるべきものではないと思われる。フランス語の *fondre* に関しては、それが内的原因によるものであることを示唆する、別の事実が存在するのである。

(22) ?*La chaleur a fondu la neige.

この文をインフォーマントに示したところ、許容できないという判断や、正しい文なのかもしれないが、普通こういう言い方はしない、という答え

など、一様に否定的な反応がかえってきた。このような場合には(23)のような使役構文を用いる、というのである。

(23) La chaleur a fait fondre la neige.

転換動詞の自動詞の使役文 (N_0 faire V N_1) と、対応する他動詞の文 (N_0 V N_1) がほぼ同義を表わすということは、しばしば指摘されるところである。

(24) a. L'éclusier baisse le niveau.

b. L'éclusier fait baisser le niveau.

(Boons et al. 1976)

だが、Ruwet(1972) および Boons et al. (1976) は、生成意味論的立場とは逆に、むしろこの二つの間の類似性より相違点に注目している。すなわち使役文 N_0 faire V N_1 の主語 N_0 は、他動詞文 N_0 V N_1 の主語に比べると、事行に対してより間接的な原因となっているというのである。そして逆に N_1 は、使役文における場合の方がより強い「自立性 (activité indépendante)」をもつというのである。

Ruwet (1972) は、*entrer*, *sortir*, *monter*, *descendre* のような運動動詞の場合には、[+ humain] の特性をもつ名詞句は他動詞構文の目的語にはなれない、という選択制限が存在することを指摘している。一方、 N_0 faire V N_1 の構文の方は、[+ humain] の N_1 を問題なく許容する。

(25) a. Delphine a entré la voiture dans le garage.

b. *Delphine a entré les invités au salon.

(26) a. Delphine a fait entrer la voiture dans le garage.

b. Delphine a fait entrer les invités au salon.

(以上、Ruwet 1972)

また、逆に N_0 faire V N_1 が、[+ inanimé] の N_1 を許容しない場合もある。

(27) a. Roman a sorti la bouteille de vodka du frigidaire.

b. *Roman a fait sortir la bouteille de vodka du frigidaire.

(28) a. Fritz a monté les provisions de la cave.

b. *Fritz a fait monter les provisions de la cave.

(以上, Ruwet 1972)

Ruwet によるこれらの指摘は、この二つの構文間にとめられる上述の相違を裏付けるものとして興味深い。

$N_0 V N_1 / N_0 \text{ faire } V N_1$ の構文間にこのような意味的相違があるのであれば、(22)-(23)の事実は、*fondre* が「内的原因」による事行であることを示唆するものであるということが出来る。内的原因による動詞の主語は、[+ inanimé]であっても、外的起因者を導入する場合、比較的強い「自立性 (activité indépendante)」を保つものと考えられる。そのため $N_0 \text{ faire } V N_1$ の構文は許容するが、 $N_0 V N_1$ の構文は許容しにくいのである。

Rothemberg(1974) は再帰形自動詞／非再帰形自動詞の区別は、その事行が外的な原因によって引き起こされるのか、それとも主語に内在する性質によるものなのか、という相違を反映するものである、とする。Zribi-Hertz (1987) の CRE (再帰能格構文) 派生の規則も、完了性に関する条件に加えて、CRE が外的原因を想定するものであることを示唆している。これらの指摘と本節の考察を考えあわせると、*fondre* が自動詞用法において非再帰形をとるのは、この動詞が内的原因による事行を表わすものだからということが出来る。

非対格性に関していえば、*fondre* は《directed change》を表わすものであるといえる。2.2.節でみたように、《Directed Change Linking Rule》は《Immediate Cause Linking Rule》に対して優先性を持つものであるから、Levin & Rappaport Hovav (1995) のシステムに従えば、内的原因による動詞であることは *fondre* の非対格性を妨げるものではない。ただ、*speak* のような動作主を主語として持つ動詞はもちろん、*glitter* のような放射動詞も含めて、内的原因による自動詞の多くが非能格動詞であることを考えると、やはりプロトタイプ的な非対格動詞からは逸脱するものではないか、と思われる。

4. *sécher*, *brûler*

sécher, *brûler* も自動詞用法において非再帰形をとる。

- (29) a. Le linge a séché.
 b. *Le linge s'est séché.
- (30) a. La maison a brûlé.
 b. *La maison s'est brûlée.

この二つの動詞に関して興味深い点は、完了的意味と未完了的意味の両方を持ち得る、ということである。

- (31) Tout le linge a séché en deux heures.

(31)は完了的意味を表わす例である。一方 *sécher* は次のような場合にも用いられる。

- (32) Des couvertures *séchaient* sur le sol, un cheval plongeait ses pattes dans l'eau, et sur le fleuve des navigateurs déplaçaient de lourdes pirogues taillées dans des troncs d'arbres.

(Halévy, *L'enfant et l'étoile*, p.36)

(32)は「毛布が干されていた」という意味になり、未完了的用法であるといえる。これは *sécher* と日本語の「乾く」の相違を表わしているという点においても興味深い。「毛布が乾いていた」というと毛布は乾いてしまっていることになる。日本語の「乾く」は *sécher* とは違い、完了的意味しか持たないのである。

brûler に関しては、次の(33)は完了的意味、(34)は未完了的意味を表わす用法である。

- (33) Toute la forêt a brûlé en deux jours.
 (34) La forêt a brûlé pendant deux jours.

5. 結語

以上、「非対格性」の問題と関連付けながら、フランス語の再帰／非再帰形自動詞に関して考察してきた。2節でみた非再帰形自動詞の *couler*

は、非能格動詞として分類されるべきものであった。*fondre* は非対格動詞として分類できるかもしれないが、内的原因による事行という点でプロトタイプの非対格動詞からは逸脱する特徴を有するものであった。*sécher*, *brûler* の非対格性に関しては、これから検討する余地のあることであると思われるが、いずれにしても、この二つの動詞が未完了の意味を持ち得るということは、やはりプロトタイプの非対格動詞からは逸脱するものであることを示すものと思われる。

このような点を考慮すると、助動詞として *avoir/être* のいずれを選択するかという問題は、フランス語においても、非対格性を論ずる上でやはり非常に重要な意味をもつものであるといえる。

[注]

インフォーマントは Claude LEVI ALVARES 氏, André KØENIGUER 氏, Jean-Christian BOUVIER 氏, Béatrix de LAMBERTYE 氏にお願いした。心より御礼申し上げる。

1) 再帰形自動詞がすべて、Zribi-Hertz (1987) のいう「再帰能格動詞」であるわけではない。

(i) Les soldats se sont réunis.

(ii) Le brouillard s'est dissipé.

(以上 Ruwet 1972)

(i),(ii)はともに Ruwet (1972) が「中立的代名動詞」と呼ぶものの例であるが、Zribi-Hertz はこのうち(ii)は CRE であるが、(i)は CRE ではない、とする。(i)の主語は動作主と考えられるという点、そして(iii)が示すように *sous l'effet de* や *peu à peu* のような表現と共起しないという点において Zribi-Hertz が示す CRE の特性を満たしていないというのである。

(iii) a. ?*Les soldats se sont réunis peu à peu sous l'effet des grenades.

b. ?*Les soldats allaient se réunissant peu à peu.

(Zribi-Hertz 1987)

- 2) 以下, 例文(4)-(8)は Zribi-Hertz (1987) による。
- 3) 「内的原因」という概念に関しては, 本稿3節を参照のこと。
- 4) もともと関係文法で提唱された「非対格動詞／非能格動詞」の用語で表わされる対立を, GB理論に組み込む際, Burzio は「能格動詞／自動詞」という用語によって表わしている。Zribi-Hertz (1987) はこの Burzio の用語を採用している。したがって彼女が「能格動詞」と言う場合, これは「非対格動詞」を指すことになる。

【参考文献】

- 荒井文雄(1988): 「中立代名動詞の派生について」, 『フランス語学研究』第22号, 日本フランス語学研究会。
- Boons, J.-P., Guillet, A., Leclère, C. (1976): *La structure des phrases simples en français: constructions intransitives*, Droz, Genève.
- Burzio, L. (1986): *Italian Syntax*, Reidel, Dordrecht.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1992): “The Lexical Semantics of Verbs of Motion: the Perspective from Unaccusativity”, in I. M. Roca(ed), *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Foris, Berlin.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1995): *Unaccusativity*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rosen, C.G. (1984): “The Interface between Semantic Roles and Initial Grammatical Relations”, in D.M. Perlmutter & C.G. Rosen(eds), *Studies in Relational Grammar 2*, University of Chicago Press, Chicago.
- Rothemberg, M. (1974): *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, Mouton, La Haye.
- Ruwet, N. (1972): *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Seuil, Paris.
- Tenny, C.L. (1994): *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*,

Kluwer, Dordrecht.

Zribi-Hertz, A. (1987): “La reflexivité ergative en français moderne”, *Le Français Moderne* 55, N°1/2.

[例文出典]

Halévy, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1987.

Les intransitifs réflexifs/non réflexifs en français et le problème de l'inaccusativité

Yoko IGUCHI

En français, l'emploi monovalent des verbes à renversement correspond à deux formes: forme réflexive (ex. Les vitres *se sont brisées*) et forme non réflexive (ex. Le linge *a séché*).

Le comportement des verbes à renversement est particulièrement intéressant du point de vue de l'inaccusativité. Les intransitifs non réflexifs comme *fondre*, *brûler* etc., se conjuguent avec l'auxiliaire *avoir* aux temps composés. Ce fait est problématique, car ces verbes sont classés en général comme inaccusatifs et la sélection de l'auxiliaire *être* constitue une des propriétés caractéristiques des verbes inaccusatifs.

Nous examinons les propriétés sémantiques et syntaxiques de verbes à renversement, recourant surtout à la théorie de l'inaccusativité de Levin & Rappaport Hovav (1995) et à l'analyse des verbes à renversement par Zribi-Hertz (1987). Notre analyse met en cause l'⟨inaccusativité⟩ de plusieurs intransitifs non réflexifs qui se conjuguent avec l'auxiliaire *avoir*. Certains se révèlent inergatifs (ex. *couler* dans *La cire coule.*); d'autres peuvent être classés comme inaccusatifs, mais ils présentent des propriétés marquées qui ne sont pas connues par les verbes inaccusatifs prototypiques. *Fondre* décrit un événement qui est causé intérieurement. *Sécher* et *brûler* peuvent avoir une valeur imperfective.

À la lumière de ces considérations, nous pouvons dire qu'en français, la sélection de l'auxiliaire *être/avoir* reflète le degré de l'inaccusativité.